

令和7年1月 岩手県教育委員会定例会 会議録

1 開催日時

開会 令和7年1月20日（月）午後1時30分

閉会 令和7年1月20日（月）午後2時15分

2 開催場所

県庁10階 教育委員室

3 教育長及び出席委員

佐藤 一 男 教育長

新妻 二 男 委員

宇部 容 子 委員

小野寺 明 美 委員

泉 悟 委員

山口 研 介 委員

4 説明等のため出席した職員

菊池教育局長兼首席サービス管理監、坂本教育次長兼学校教育室長

武蔵教育企画室長、古川予算財務課長、武藤義務教育課長、中村保健体育課総括課長

教育企画室：女鹿主任主査、安倍主事（記録）

5 会議の概要

第1 会期決定の件

本日一日と決定

第2 事務報告1 事務報告1 令和6年12月県議会臨時会の概要について（教育企画室）

別添事務報告により説明

新妻委員：補正内容について質問があったということですが、補正内容というのは、学校給食等で物価高騰している中で、色々と補填を行うというのが基本的な内容だと思うのですが、どのような質問だったのかを教えてください。

古川予算財務課長：斉藤議員からの質問があった内容につきましては、一関附属中学校でミルク給食を実施しており、そのことに関する質問、牛乳が値上がりしており、令和6年4月から県内一斉に同じ単価で納入しているところですが、その単価が6円近く上がっていることに関する質問、特別支援学校の給食が主な内容になっているのですが、どのくらい値上げをしているのかという質問、それから、特別支援教育就学奨励費という、世帯の収入に応じて教材費や給食費を国の方で補填するという制度があり、1段階が給食費を全額補填、2段階が半額、3段階がなしということになっておりますが、その認定の割合に関する質問、この4つでございました。

第3 事務報告2 令和7年度県立一関第一高等学校附属中学校入学者選抜検査の実施について（学校教育室）

別添事務報告により説明

第4 事務報告3 令和6年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果について（保健体育課）

別添事務報告により説明

宇部委員：調査の集計と分析大変お疲れ様でした。岩手は60（ロクマル）運動、それから60（ロク

マル) プラスプロジェクトということで、その成果がやはり体力の維持や全国より上回っているという結果を導いているかと思しますので、継続して指導していただくことが大切だと感じています。ただ、先ほど中村課長がおっしゃった通り、小5の女子は、特にスクリーンタイムにおいても、それから運動時間においても、経年比較で減少しているということで、川島隆太先生もやはり基本的な生活習慣や、それからスクリーンタイムの脳への影響というものも検証なさっておりますが、今後も気をつけて、全員で子供たちに良い生活習慣を持たせていかなければならないと感じております。

中村保健体育課総括課長：スクリーンタイム増加については、生活習慣の変化によって増加しているということは事実であるというように捉えております。学習以外でのICTの活用により効果的なこともあるかとは思いますが、1日の生活をしっかり、バランスよく、その中でスクリーンタイムやICTに関わる時間を取り入れて、児童生徒が自身で自らの生活をデザインできるような取組を進めて参りたいと思います。

小野寺委員：今お話のあった分析を聞き、なるほどと思いました。基本的な生活習慣と運動習慣がかけ離れているわけではなくて、基本的な部分を、両方並行していかなければならないのだと、しみじみ感じました。全国的に見れば、岩手は運動能力に長けた子供が一生懸命頑張っているのかと、色々な結果を見てもそうしたところが基本的にあり、喜ばしいと思っているのですが、運動が好きな子、それから苦手な子の差、格差といいますか、それもまた広がっているのではないかなというのを感じております。本県で、例えば、地域的な差といったものを感じていることがあれば教えていただきたいです。

中村保健体育課総括課長：女子の運動好き、肯定的な回答をしている運動好きや、やや好きという児童生徒については、あまり数値的な変わりはないですが、運動が好きという児童生徒は実際減ってはきています。地域による格差、地域の状況というのは、今、具体的にどこの地域というのはないのですが、いずれ効果的な事業を展開する上で、地域の状況や学校の状況の現状を把握することは必要だと思っていますので、次年度以降、そうした状況把握をしっかりやっていきたいと思っています。

新妻委員：毎年行っている調査で、経年変化がわかるというのは非常に良いことだと思うのですが、全国な数字はこのグラフや図表にあるようにある程度の傾向が出ており、独自に岩手県を重ね合わせるとこうなりますという形だと思うのですが、国の方で公表している数値、全国的な状況を何か分析するということは行っているのでしょうか。

中村保健体育課総括課長：一般的な全国の傾向というものがまとめられたものはあります。その中で、各質問紙調査の分析、こういうことが必要ですというようなコメントなどもまとめられております。

新妻委員：いわゆる調査項目ごとに数字化・グラフ化して、それについて、一定のコメントがされている。そうすると、例えばですが、4ページについて、体力合計点が、全国の数値が令和3年あたりから急激に落ち始めています。おそらく、コロナの影響があるのだろうなということはあるのですが、長いトータルで見ると、これから先、令和6年度の数値をこれだとすると、コロナからの回復が行われるとすれば、この数値だけ見ると、今年・来年あたりから徐々に上がっていくという感じがするのですが、ただ、最盛期まで行くだらうかという、そういう感じでもなさそうで、この全体的な落ち込みというのが、コロナ以外の影響として特別に論じられている、指摘されていることがあるのか、あるのであれば、それは岩手の場合どうなのだろう、そういった分析に使いやすいものがあると、せっかくの経年調査なので助かるのですが、どうでしょうか。

中村保健体育課総括課長：令和5年度の調査では、まとめのコメントの中に、コロナで落ち込んだ後の運動習慣のままで、それ以前のところには戻っていない、そういう状況に戻すことが

必要、重要だというようなコメントはあります。実際、コロナ禍で、運動習慣、運動時間は減ってきており、それに伴い、体力合計点も落ちているというのは確かです。逆に、運動習慣が減って、それこそICTの活用が一般的になったことにより、スクリーンタイムが増えているというのも事実かと思えます。いずれ、そうした現状、状況についてはしっかり把握して、今後の事業改善等も含めて、各地域、各学校、男女によっても違うかもしれないので、そうした点については、県教育委員会としても、一般的にこういうふうに思われるというものも示していきたいですし、それだけではなく、各地域や学校での分析など、必要な分析を行い、効果的な取り組みに繋がるような働きかけは必要だと認識しております。

新妻委員：コロナの影響はもちろんあったと思いますし、まだ続いていて、それからの回復も短期間では簡単ではなく、一定の時間を要するだろうということはわかります。ただ、それだけで全部説明できるのであれば良いですが、やはり、それなりの要因が働いている可能性があるとするれば、スクリーンタイムの問題もありますが、その要因は何かということについて、常に考えておく、注目しておく必要がある。それから、岩手について言えば、やはり、体力・運動能力があり、運動習慣も比較的定着しているほうだということ自体は、子供の発達にとって非常に良いことだと思いますし、そういったベースがあるからこそ、他の領域、つまり学習などに取り組めるベースとなることから、非常に大事なことであり、もっともっとアピールして良いと思います。

ただ、これも1つわからないのは、なぜ女子の方が落ちているのか、例えば、女子はとりわけスクリーンタイムは若干多いのですが、そのことが、ここまで極端な形で作用するのかなというように、そうした関係について、少しわからない点も多々あります。平均的に女性の方に大きく出てきてしまうということの背後にある理由は何なのか。これだけではわかりづらいところがあるので、そうした点について、統計的な調査結果はこうだということと、もう1つは、現場で子供達と関わっている方々から見た実感レベル、あるいは観察レベルで、どうということが課題になりそうなのか、なぜ男女の差が出てくるのか、現場の先生方の実感レベルで当たっていることも結構ありますので、そうした点について、模索していただければありがたいなと思います。

宇部委員：今の話とも関わりますが、部活動が強制ではなく、任意参加になったことにより、運動部に入らないという話を現場から聞いておりました。そうした中学校では3分の1ぐらいは入っていない子供がいて、そういう子供たちが入学するとどうなるかなと心配なさっていた方もいました。地域移行になれば、またそこで運動することにもなりますし、世の流れが健康志向で、大人も走ったり歩いたり、シニアの方も頑張っているという傾向になってきていますので、地域移行で運動の本当の大切さも感じることも出てくるかなという希望もあります。今までの部活動で運動していた時間がなくなり、帰宅部のような子供が増えているということもありましたので、そうした点について、もしも気になるようであれば、確認をしていただければ良いかと思います。

新妻委員：女子に帰宅部が多いといった特段の傾向はあるのでしょうか。おそらく、全般的に部活動の種類や種目も減っていますので、自分に合うというように思えなくなれば、部活動を避けてしまうということも、微妙には作用するのでしょうか。要因はそのこと1つのみではないかと思いますがどうでしょうか。

中村保健体育課総括課長：今までは、学校にある部活動の競技は1つだけだったのですが、国がイメージしている地域移行は、例えば、バスケットボールで大会出場参加を目指す地域クラブがあれば、ファンの楽しむためのバスケットボールチームもあるといった、競技だけではなくて、色々な各カテゴリーや考え方に応じた対応も可能になるのが地域移行だというように言われているので、学校の部活動にはなくても、そうしたところで自分に合ったものを選べるというのが地域移行ですので、うまくいけば、そうした形で運動時間を確保できるかと思っています。

新妻委員：楽しむということを奨励されていますよね。だから、逆に競技スポーツだけだと、やはりスケールダウンしてしまうというケースがあるが、そうではなく、裾野が場合によっては広がるという可能性もあるかもしれませんので、もう少し様子を見ないと、やはり1つの要因での説明はなかなか難しい。

ただ、全体的に体力があり、運動に関心があり、層として厚いということ自体は、子供達の努力を褒めてあげたいし、やはり、何かを踏ん張ることができる力の1つにはなっていると思います。基礎体力があつてこそできることはたくさんあると思いますので、広い意味での評価をしてあげたほうが良いというように思います。

泉委員：前年比と全国比のデータも良いとは思いますが、これは学力向上の時もそうですが、例えば、令和3年に小学校の5年生だった子は、令和6年に中学校2年生となりますので、同一集団の後追いというもの、岩手県としてどうなのかといったことが、分析の結果の中にあれば良いのかなと思います。そうした視点で見ると、8ページのスクリーンタイムなどは、他の年度は違うかもしれませんが、令和3年の男子が、令和6年の中学校2年生ではほとんど変わっていない。女子についても同じなので、この集団は、学年が変わっても同じ子はずっと見ているというように捉えて良いように思います。その集団によって変わることもあると思いますので、そうした分析の仕方もしていただいた方がいいいのかと思いますながら、資料を拝見しました。

次に、睡眠時間をスポーツ庁では8時間以上とることが好ましいということで、この8時間が掲げられていると思うのですが、小学校から中学校に上がって、約半分以下に下がっている、その理由が一体何なのか、スポーツなのか、そうした点も知ることができれば良いと思っております。それから、睡眠時間のピークがどの時間なのかということも気になりました。この8時間以上が望ましいということはわかりますが、ピークが多いパーセントの睡眠時間は3時間なのか4時間なのかということは少し気になります。全国と比べてわずか数パーセントの差しかないから、それで良いということではなく、もっと根本的なところで、8時間睡眠をとるためには、今、ピークが5時間であるならば、その5時間を8時間に近づけるために、何をすべきかという視点があっても良いのかと思います。

中村保健体育課総括課長：今回の結果については、全国調査で小学校5年生と中学校2年生、その時々体力や生活習慣を比べるというものですが、本県では、小学校5年生、中学校2年生だけでなく、小学1年生から高校3年生まで、毎年、同じような調査をしており、その結果を各学校にフィードバックしておりますので、その中で、各学校でその資料をうまく使えらとと比較はできると考えております。

泉委員：各学校の判断で行うということでしょうか。

中村保健体育課総括課長：各学校にも学年ごとの結果はフィードバックしますので、そこで前年度と、前年度と同じ学年との比較もできますし、1つ学年が上がっても比較できます。

泉委員：そうした視点というのは、こうした見方もしてくださいということを、各学校に伝えているわけではないのですよね。そういう視点で見る学校もあれば、こうなんだ、というところで終わる学校もあるかもしれません。ですので、通知などにデータの見方やこうした視点で各校での分析に寄与してくださいといった文言があれば良いのかと思います。

新妻委員：今おっしゃったように、毎年のように調査を行っており、学年進行で追跡ができるようになって、変化が辿れる、例えば、どの年齢で急激に変わるのか、変わらないのか、といった、いろいろな使い方ができるということをお知らせすると同時に、他県の政令指定都市でみたことがあるのですが、こうした統計や調査のクロス集計を、例えば、スクリーンタイムの長い子とスポーツへの参加度合いが違うかとか、睡眠時間とスクリーンタイムの長さがどう関連しているかなどについて行っているようです。せつかくの調査ですので、どういう使い方をするとこういう傾向がわかりますよということを、地域ごとに仮説を立ててやることや、あるい

はこうすればこういうことが得られることもありますとか、そうしたことのアドバイス、あるいは、例としてこれとこれをクロスするとこういう結果が出てきますよといったことを例示するというのもあっていいかもしれません。少し大変だとは思いますが、学校現場では、多くの調査がある中、調査に協力はしてその結果をもらうが、どう活用するのかというところまでいかないケースもあると聞いていますので、県教委も大変だと思いますが、活用に向けた方策という辺りも少し考えていただければ大変ありがたいなと思います。

中村保健体育課総括課長：クロス集計して見えるようにはなっておりましたので、そういう見方がありますという周知は確かにお知らせする必要があるかと思います。

新妻委員：先生方もお忙しいところですので、なかなかそこまでやってみるかというところまでいかないですが、こういう活用の仕方、効果、見える部分がありますと言われると、少し時間はかかるけどやってみようかという気持ちになるかと思いますので、ぜひお願いしたいなと思います。

山口委員：個体差といいますが、その年、学年ごとの差というのはどうしてもあり、その揺らぎは絶対出ると考えています。その中での全国的な傾向とそこから岩手が外れている部分の分析が必要なかと思います。例えば、子供の数が減っているといったことや公園で球技ができなくなったといった影響で、長い目でみればおそらく体力は落ちているのかと思います。例えば、子供の数が減ると点数が下がるといった全国的な傾向があった場合に、それが岩手に出たとしても、そこは気にしてもしょうがない部分だと思います。全国的な分析と、そこから外れた岩手の傾向といった視点が必要かと思うのですが、そういった分析はあるのでしょうか。

中村保健体育課総括課長：全国調査の分析もあるのですが、今年度については、全国と比較しても同じような状況です。現時点では、あまり岩手独自の問題や課題となるところはないかと思います。

山口委員：そうしたことがあれば、そこには目を向けなければいけないのではと思っておりました。それから、資料の3-4の中2男子の体力合計が、平成24年だけ突き抜けて高くなっていますが、これは何か理由は分かりますでしょうか。例えば、国体や国スポに向けて、強化している年代だからとかということがあったりするのでしょうか。

中村保健体育課総括課長：震災の影響で、調査が悉皆ではなくなり、提出できるところのみとなったことなどが影響の1つなのではないかと考えられます。

会議結果の公表は、教育長に一任することとして議決された。